

お正月 だから 聞きたい!!! 2018

新年あけましておめでとうございます。今回の特集は、2018年が始まるにあたり、気になる話題をピックアップした。なにより楽しい「初売り」について佐賀玉屋の田中丸雅夫社長に聞いた。同社で昔から続く初売り名物の裏話のほか、佐賀市民の「生活」を支えるパートとしての思いを語ってもらった。秀島敏行・佐賀市長にはこれからの佐賀市政についてざくばらんに聞いた。お正月に家庭や街中にある「正月飾り」。五節供を楽しむ会代表の中島紀代子さんに、そこに込められた思いについて教えてもらった。

佐賀の初売り 佐賀玉屋田中丸社長

正月といえば「初売り」。創業から212年を重ねる郷土を代表するデパート・佐賀玉屋は老舗にふさわしい伝統を大切にしながら、お客さんの気持ちに寄り添った現代的な工夫もおろそかにしない。同社社長の田中丸雅夫さんに正月商戦について聞いた。

2018万円福袋も!!

佐賀玉屋の正月は伝統的に2日午前10時からスタート。毎年、開店前から列ができるという。先着1千人には、お金を洗うと何倍にも増えて戻ってくるといういわれのある銭洗弁財天(鎌倉)の霊水で洗った御賽銭(5円玉)をプレゼント。なんと毎年、社員が約20kgの硬貨を佐賀から鎌倉まで運び、ザルでしっかりと洗って持ち帰ってくるという。田中丸さんは「もう50年以上続いている伝統の行事です。せっかくなので縁起物なので新品の5円玉を銀行さんに頼んで1年がかりで用意してもらっています。毎年「初巳の日」(2017年は12月8日)に社員1人を派遣しますが、空港の検査でひっかかったり、重い硬貨を持ったまま電車を乗り継いで山の中腹の弁財天まで運んだり、毎回いろいろ苦労が多いようです」と語る。佐賀市民に福を届けたい、という強い思いが伝わってくるエピソードだ。

目玉の福袋は初日限りの販売だ。全館で3〜4千袋を用意。人気の食料品が詰まった玉ちか福袋は、肉やお菓子、果物など、各ジャンルごとに商品が詰まっている。また衣料品は各ブランドごとに福袋を用意するという。正午すぎには、ほぼ売り切れてしま



伝統守りつつ工夫忘れず

うという人気ぶり。宝飾品中心の「ドリーム福袋」は最高額2018万円!! 新年にちなんだ値段設定という遊び心が嬉しい。「基本は販売価格の倍以上の価値があるように準備しています。売り場では福袋の中身を詳しく伝えたりと、欲しいものが手に入るように配慮しています。福袋には運試しの要素もあるのですが、デパートなのでお客さまの期待を裏切ることできません」と田中丸さん。福袋独特の当たりハズレ感がないのは少しさみしい気がするが、欲しくないものは入っていないというのは、やっぱり嬉しい。

家族連れで楽しむ

初売り気分をさらに盛り上げる恒例の「初商招福抽選会」は2〜4日まで。1万円の商品券など外れなしの大盤振る舞い。佐賀玉屋の年賀はがきを持参すると1人1回引けるほか、買い上げ税込5千円ごとに1回抽選できる。「正月なので、なるべく数多くの方に幸せをお分けしたいと思っています。中にはひとりで30〜40回引かれるお客さまもいらっしゃいます」。

そのほか、お正月特別企画として「生誕90周年記念 漫画の神様 手塚治虫版画展」を8日まで開催。「鉄腕アトム」や「リボンの騎士」、「ブラック・ジャック」など手塚治虫の代表作の版画を展示。また同時開催として、「あしたのジョー」や「ドラえもん」、「ルパン三世」などのアニメのセル画も展示している。田中丸さんは「家族連れでの来店を意識して企画しました。これからも佐賀になくてはならない『生活』の場として愛されるデパートで有り続けたいと思っています」と語った。



草場佩川「松に鶴図並画賛」

絹本墨画淡彩 54.0×62.2cm 江戸時代 佐賀県立博物館蔵

肥前さが幕末維新博覧会・プレ企画展「没後150年 草場佩川一奇才の遺産」

(12/22-2/4、佐賀県立博物館、多久市郷土資料館)に展示予定



プロフィール

ひでしま・としゆき
 昭和17年/佐賀市本庄町に生まれる
 昭和36年/佐賀高校卒業
 昭和41年/熊本大学 法文学部 法学科卒業
 佐賀市役所職員
 平成9年/佐賀市消防長
 平成11年/佐賀市水道局長
 平成15年/佐賀広域シルバー人材センター
 事務局長
 この間、本庄町体育協会役員として20年間
 活動
 平成17年/佐賀市長 就任
 平成21年/佐賀市長 二期目当選
 平成25年/佐賀市長 三期目当選
 平成29年/佐賀市長 四期目当選



「幸福感」感じるまちづくりへ

「都市の暮らしやすさ全国1位」という調査結果が出ましたが、その要因は何だと思えますか？

調査結果を見ると、医療機関や小売店、飲食店が整っていて、そして住宅をはじめ、少ないコストで質の高い生活を送ることができるといったことが評価されていたようです。また、地域コミュニティの絆の強さなども評価が高かったようです。

私が、暮らしやすさを感じるのには、やはり食べ物や美しいということと自然が豊かだということですね。

それに、人のつながりは重要ですね。隣近所のお付き合い、地域のコミュニティが、しっかりとできているということは、安心して暮らせることに繋がりますから。

地域に「一体感」醸成

「これまでの3期を振り返っての自己採点(100点満点で何点か)と、その根拠を教えてください。」

75点ぐらいいただいても良いのではないかと思っています。

私は、8市町村の合併で新しくなった佐賀市の最初の市長ですので、まずは市民の皆さんが「一体感」を持つていただくことに力を入れました。地域が一体感を持ち、一つになるということは、経済、産業などあらゆる面で活性化に繋がっていくと考えるからです。そこで、はじめに取り組んだのが「地域コミュニティの活性化」

佐賀市の未来予想図 秀島敏行市長

です。

それから、三重津海軍所跡の世界遺産登録、東よか干潟のラムサール条約湿地登録、そして熱気球世界選手権の開催も、市民の皆さんが、地域に誇りを持ち「一体感」を感じていただくことに繋がったと考えています。

こうした中、昨年7月に野村総研が発表した「成長可能性都市ランキング」において「暮らしやすさ」「子育てしやすさ」で高い評価を受けたことは大きな喜びでしたし、同時に、これまで取り組んできたことが概ね正しかったのだと確認できたところです。

25点分のマイナスは、マニフェストに掲げた事業のなかに、実現できなかった部分がいくらかあったことですかね。

「今後4年間の施策について秀島市長は「6本の柱」を掲げています。それぞれについて、狙いと具体的な策を教えてください。」

1つ目の柱は、「経済・産業の活性化」です。暮らしやすい町であるためには、何よりもまず、「働く場」があることが必要です。このため、新しい工業団地の整備、マイクロソフト・イノベーション・センターの活用、事業承継の仕組みづくりによる雇用の場の確保に努めたいと思っています。

2つ目の柱は、「バイオマス産業都市の推進」です。地球温暖化の原因物質である二酸化炭素を減らすことから一歩進んで、二酸化炭素を有効な資源として活用する方策に取り組んでいます。具体的には、藻類はもとより、農業への活用や有効成分の抽出といった工業分野へも使っ

ていきたいと考えており、こうしたことで、市内産業の活性化と雇用の拡大をめざしています。

3つ目の柱は、「文化・スポーツとコミュニティの推進」です。スポーツに関しては、佐賀国体の開催に向けて、施設や体制を整える必要がありますし、地域コミュニティに関しては、校区ごとに設置をお願いしている「まちづくり協議会」に地域活動の核となっていただけのような支援を充実していきたいと考えています。

4つ目の柱は、「子育て・教育環境の充実」です。特に子育てに関しては、増加傾向が続く発達障がい児のトータルライフをサポートするような体制の整備に努めたいと考えております。

5つ目の柱は、「福祉・健康の増進」です。先日、市役所の庁舎改修にあわせて設置した福祉総合窓口の機能強化を進めるとともに、全国から注目されている高齢者見守りネットワークをさらに充実させていきます。

6つ目の柱は、「安全安心のまちづくり」です。特に、大雨に際しては、ポンプ場などのハード整備に加え、合併して川上から川下まで一つの自治体になった佐賀市の市民連携によって、浸水被害を軽減したいと考えています。

150年後へ人材育成

「2018年は「明治維新150年」、佐賀市の150年先をどのように想像しますか？また、その未来を実現するために必要だと思われることは何ですか？」

人工知能が、ものすごい発展を遂げていますので、150年後を想像するのは大変難しいですが、人工知能や機械が、私たちが人間らしい暮らしをするためのツールであり続けてほしいと願っています。

こうしたことを踏まえたくうえで、150年前がそうであったように、佐賀市が全国はもとより、世界から注目されるような都市になってほしいと思います。

その実現に必要なことは、これも150年前の佐賀と同じように、人材を育成すること、失敗を恐れずに、様々なことにチャレンジすることだと思っています。

「毎年お正月はどのように過ごしますか？またお正月の思い出を教えてください。」

元旦は、午前零時に佐嘉神社で行われる、カノン砲祝神事に行きます。一晩寝て翌朝は、毎年恒例の新春五社詣に行き、その後地元由緒ある神社などに初詣に行っています。

普段家で過ごす時間が少ないので、お正月は、できる限り家族と一緒にお雑煮を食べたりしますね。

「最後に2018年を迎えるにあたり、佐賀市民へメッセージを!!」

私は、10月に新しい4年間の市政運営をお任せいただきました。これまでの3期12年間は、市民の皆さんが、健康で普通の暮らしができること、例えば、快適な住宅に住んで、安全で美味しい食事が食べられるという普通の生活こそが、皆さんが、一番「幸福感」を感じていただけることだと考え、その実現に向けて、様々な事業に取り組んできました。

これからも、市民の皆さんが「幸福感」を感じていただけるまちづくりに全力で取り組んでいきたいと考えております。皆さんのご支援ご協力をよろしく願っています。

お正月風習の由来

◆しめ飾り…家の入口に飾り、神さまがやってくる清められた場所であることを示す。悪いものが侵入するのを防ぐ。しめ縄は地方によって様々だが一般的に新しく収穫したワラで編まれる。飾りには、ゆずり葉やウラシロ、シデを使う。

◆門松…家の門や入口に立てる、松や竹でつくった飾り。木の幹や枝の先に神さまが宿ると考えられていたことから、年神さまが迷わず家に来られる目印になっている。「松」は神さまを「待つ」につながっているほか、常に青いことから長寿のシンボルとされている。鎌倉時代から竹と一緒に飾るようになったという。まっすぐに伸びる竹にも長寿の願いが込められている。玄関に左右一対で置かれ、向かって左を雄松、右を雌松と呼ぶ。

◆お年玉…本来はお金ではなく、年神さまにお供えしたお米やモチだった。新しい「とし」の「たま」しいをもらうという意味で、新年を元気に暮らせるようにとの願いが込められている。江戸時代、商家の主人が、奉公人へ餅の代わりにお金を渡す風習が広まったという。

◆正月あそび…「凧揚げ」は男の子が無事に育つようにとの願いを込めて、男の子が生まれて初めて迎える正月や初節句に贈った凧を空に揚げたことが始まり。「羽根つき」はコンコンと羽子板で羽をつく音で、災難や邪気を「はね」のけることができる

◆初夢…元旦の夜から2日の朝にかけて見る夢のこと。縁起が良い夢とされる「一富士は無事、「二鷹」は高く、「三茄子」は事をなす、を意味している。

「ちよつと細かい気がしますが、小さなことに意味を見出していくのが面白いところです。正月飾りを始めとして、日本の年中行事には、その時期に収穫される力のある農産品などで四季の循環を感じつつ、そこに祈りや願いを込めます。それを毎日の生活に採り入れることで、自然と共生した無理のない丁寧な暮らしに少しずつ近づくのではないのでしょうか」と中島さんは語る。床の間がない家庭が増えた現代だが、テーブルの上や棚の中など、工夫次第で季節を感じるものを置くことはできる。「自然を感じるものを家の中のどこかに、自分なりに作ることで、心をリフレッシュすることができそうです。そういう気持ちの贅沢にぜひ挑戦してください」。



「正月とは年神さまをお迎える行事のことです。年神さまは新しい年の幸せや健康をもたらすといわれる神さま。豊作をもたらす農耕の神様であり各家庭のご先祖です」と中島さんは解説する。昔は12月13日の「正月事始め」から「すすらい」として家の掃除を始め、30日までにはしめ縄や門松などを飾り終え正月を迎える準備を終えたという。「12月29日は苦につながら、大晦日は急場しのぎで良くない、とされ、12月28日か30日まで準備を終えるのが良いとされています」。

かみかみこ意味が

正月飾りの代表である「鏡餅」。「お餅には稲の霊が宿っていて、食べると力が授けられると信じられていました。また、昔の人は様々なものを映す「鏡」に神秘的な力を感じ、そこには神さまが宿ると



正月飾りの意味 中島紀代子さん

春にいつも目にする「正月飾り」。飾られている植物や器のひとつひとつには、実は深い意味が込められている。年中行事に因んだ植物や調度品を飾る「しつらい」を日々の暮らしに採り入れる活動を行っている「五節供を楽しむ会」。小学校や大学での講演経験も豊富な同会代表の中島紀代子さんに正月飾りに込められた思いについて教えてもらった。

考えていました。お餅を鏡を模した丸い形にすることでパワーアップ。さらにお餅を2つ重ねることで太陽と月を表したり、多くの幸せが重なることを願います。鏡餅の飾り方は地域や家庭で少しずつ異なります。今回は我が家に伝わるものを紹介します」と中島さん。まず「三方」の上に奉書紙を敷く。「尊い方のための台である三方には3カ所に宝珠状の穴が

空いています。これは年神さまの声を聞くためとされています。空いていない方向を後ろにして置きます。鏡餅をひとつ置き、昆布とスルメ、シダ科のウラボシ、ゆずりは、干し柿を置く。「スルメは日持ちの良い食品であることから、末永く幸せが続くという意味が込められています。昆布は喜ぶ。ウラボシは『裏黒』の逆で清らかな心を意味します。2つの

葉を向き合わせて供えることで、夫婦の髪が白くなるまで仲良く暮らすという願いを込めています。ゆずりはは、新葉が出てから親葉が落ちることから、代々受け継いで繁栄していくことを願います。また赤い茎が邪気を払うとされています。柿は「嘉来」とも表し、喜びが来るといふ縁起が良い食べ物です。カラスも食べられないような渋柿でも寒風を耐え忍ぶことで甘みが増すことから、修行して成長したという意味で、干し柿のことを修練柿とも呼びます」。2つめの鏡餅を重ねたら、一番上に橙を置く。「橙は、読み方と同様に、ひとつの木に何代もの実がなることから、代々家が続きまうという願いが込められています。柑橋類は橘が吉に通じます。大きければ大きいほど「大吉」となり縁起が良いと言われます」。今回は単人瓜と干支である戌の置物も飾った。「単人瓜の若草色は新春の色であり、大変生命力がある植物です。単人は、先駆けることから一番の意味します。別名千成瓜」といいますが、千成とは結果がたくさんあることで縁起物です」。1月11日の「鏡開き」は年神さまにお供えした鏡餅を、おさがりとしてもらい、力を分けてもらう行事。「切る」というと神さまとの縁が切れることに繋がるので、「開く」という言葉を使い、木づちなどで砕いて食べます」。

床の間なくてもOK

正月料理のといえば「おせち」。年神さまにお供えする特別な料理であり、家族で食べると幸せになるといわれている。今回は料理に使われる素材で「おせち飾り」を作ってもらった。「おめでたい」という意味につながる「芽出し」の野菜を集めてみました。人参は、赤色に邪気払いの意味があり、百合根は「百が合う」ことからみんな仲良く、蓮根は穴が開いているので「見通しが利く」。くわいは良い芽が出ることから気のエネルギーに満ちています。紅白のかぶらは「おめでたい」。金柑は金色が金運に通じる。栗を干した「勝栗」は勝つこと。飾りに使う南天は、難を転じることから災難除けの願いが込められています。ダジャレのような言葉遊びからいろいろ願いを込める様子を、日本の伝統の軽やかさを感じる。

言葉遊びと願い に心を込めて